

前回の「医療面接」の特集の中で、模擬患者さんとはどういうものなのかという基本的なところを紹介しました。模擬患者さんの必要性、求められる資質、どんなトレーニングを受けるのかなど、疑問に感じたのではないのでしょうか。

今回は、これらについて、具体的にご説明いたします。

なぜ模擬患者さんが必要になってきたの？

1970年ころから、患者さんの人権を尊重することが叫ばれました。患者さんが一人の人間として恥ずかしい感情を抱くことなく医療を受けることが常識となってきたのです。それまで行われていた見世物的な講義（臨床講義）や学生の診療行為は大幅に制限されるようになってきたのです。一方で、医学知識は膨大な量になり、学生は朝から晩まで講義室に座っていることになってしまったのです。そこまで来てようやく、このようなシステムで立派な臨床医が作れないことに気がついたのです。1980年代後半から、いろいろな工夫や改善がなされてきました。この流れが、現在世界中で起こっている「医学教育改革」なのです。臨床現場に立たされた瞬間に、学生さんはギャップに大きな衝撃を受け、自信やプライドがはずたになります。そのようなことが起こらないように臨床現場を段階的に学習し徐々に成長していくためには、模擬患者さんは不可欠なのです。そしてそのようなシステムを構築することが、「医学教育改革」の根幹的な部分になるのです。

どのような人が模擬患者さんにふさわしいの？

医療に理解があり、立派な医師を育てたいと願っている方であればどなたでもなれます。ただし、患者の役を演じることになりしますのでシナリオを覚えられる方という制約があります。一方、あまり好ましくないのは、医療関係者、教育関係者です（ですから私は失格です。残念！）。医療に従事しているとついつい理想が高くなってしまいがちで、「そんなことでは、患者さんを助けられないよ」とか「患者さんが救われませんね」とそのような見方や発言をしがちですが、これは、初心者の学生にとっては大変酷な話です。できないから勉強しているのですから、学習意欲をそぐことになります。また、医療トラブルをご自分あるいは家族で経験された方も不向きであるとされています。それは、学生や研修医の何気ない一言でトラウマが思い出され、過剰に反応してしまう可能性があるためです。この点は、学生や研修医に愛情を持って接することができる方であれば、乗り越えられる問題かもしれません。



5月14日には、模擬患者さんたちが、医療面接実習・グループ討論等を通じてお互いを評価し合う勉強会を行いました。

模擬患者さんはどのような勉強をするの？

一人の患者になりきって演じるのですから、最初に渡されたシナリオを暗記します。患者さんの背景（年齢、職業、家族）を覚えます。次に病院を受診することになった症状（動機・原因）を覚えます。「何時から、どのような症状が、どれくらい続いているのか」「最初の病院に行ったら、どのようにいわれてどのような治療を受けたのか」とか「どのようなことをすると症状が悪化し、どのようにすると軽快するのか」などを追加して暗記します。

一通りマスターしたら、実習を行います。今年5月から愛知医科大学で毎月1回練習を行っています。図1のように役割を分担して、お互いが評価しながら研修します。

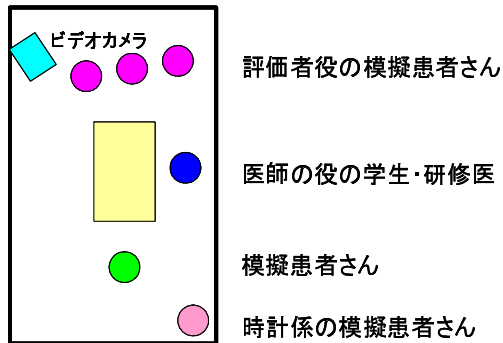


図1. 模擬患者さんの研修会

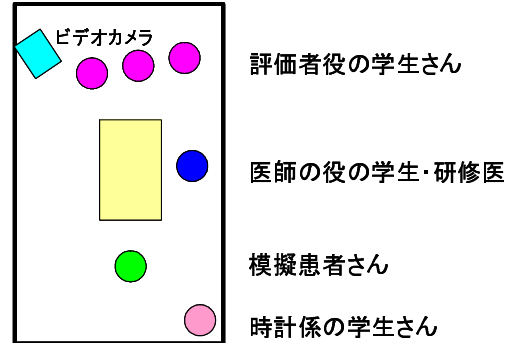


図2. 学生さんの医療面接実習

今後の医療面接の予定はどんななの？

(※ 決定事項ではありません。以下の実施計画案を今後の教務委員会で検討していきます。)

3年生：9月8日（木曜日）午後から、pre-OSCEのプログラムがスタートします。最初の1～2時間は、オリエンテーションです。その後は、医療面接の実習を11月中旬まで行います。そこで一般社会人としての常識、医師としての心構え、医療面接の基本をマスターします。これを受講していないと翌年のOSCE実習は受けることができませんので注意してください。また、身だしなみが悪い学生は受講できませんので併せて注意してください。（図2のように学生さんが評価者役と医師役、時計係を順番に行って実習します。）

4年生：8月～9月頃に医療面接と身体診察の実習を予定しています。これを受講していないと2月のOSCE実習（2週間特訓を行います。OSCE本番と同じような形で実戦訓練）を受講できませんのでご注意ください。

愛知医大の模擬患者さんの声

献身的な治療にお返しを！

西田 牧

私は、昭和2桁初頭の新潟県生まれです。模擬診察勉強会へのきっかけは、足掛け20年近くにおよぶ、当病院での慢性腎炎（IgA腎症）と腎癌の治療で、関係の先生方をはじめ、看護師さん看護学生さんによる献身的な治療を受けたことに対し、何かお返しがあればと考えての事です。

当初は大変不安でした。まずシナリオを覚えきるのに一苦労、面接時にはつい助け舟を出してあげたくなり、演技者になりきれずアドリブもままならい、果ては数日來の風邪により急に咳き込んでしまい、”面接中断”と自ら叫んでしまったことなど、ご迷惑をおかけしてきたのではと猛省しています。反面、この参画を通して多くの学生さんに接すると共に、諸先生方の熱心かつあたたかいご指導を賜り、有意義な勉強をさせて頂きましたことは大変光栄です。

今後も一層努力していきますので、変わらぬご指導の程お願い申し上げます。



(撮影協力：(前頁左から)先生役の鈴木医師(消外)、福沢医師(消内)、佐藤医師(血内)、学生有志の小柴さん(5年生)及びSPの皆さん)